

関連諸科学の方法—民族誌

はじめに

クライド・クラックホーンは『人間のための鏡』の中で、考古学と民族誌について次のような興味深い指摘を行っている。

現存する民族を人類学的に記述する作業と、考古学とは原則的には同じである。考古学は過去の民族の民族誌と文化史であるといってもよい。「民族誌学者は考古学的事実を生け捕りにする考古学者である」とすら言われている。

実際、われわれはが発掘調査その他によって入手することのできる考古学的資料は、残存しやすい（腐食しにくい）物質だけであり、それもある意味では偶然に、結果として保存されてきたものである。そうした資料上の制限があるうえに、社会とか制度、あるいは精神とかといった、当時の人々ですら眼にすることができないもの、手にとって確かめることができないものは、その中には含まれないという制約がある。

民族誌的調査と人類学的調査

民族誌は一般的には、「特定地域の特定文化について記述する、人類学の一部門である」と定義される。すなわち人類学者がある特定の地域にある民族社会の中に住み込んで、数年間生活をともにしながら、眼にしたこと、耳にしたことあるいは感じたことをモノグラフとしてまとめたのが民族誌である。生きている現実の社会生活を目の当たりにするゆえに、生き生きと生活誌を綴ることができる。19世紀の末から20世紀前半にかけて、こうした民族誌の調査が世界各地で盛におこなわれ、膨大な資料の蓄積がなされた。

今日ではモノグラフを作成する過程で、その任にあたる人類学者の価値観が入り込むために、客観的な記述はありえないとして、以前のような総合的な民族誌の調査を行うことは廃れてきている。その代わり一定の関心の下に課題解決法の一方法として、民族誌の調査が行われるようになってきている。このことは裏返すと考古学的な関心で民族誌の調査が可能であることを物語っている。考古学調査で得た資料と民族誌が示す内容とがうまく結びつきうるとしたら、より具体的に考古学的事象を捉えられるので、考古学者はよりの確に歴史を把握しうようになる。

民族誌に基づく分析

18世紀の末アメリカで数年間生活したイギリス人ポウノールは、イギリスの先史時代人はアメリカ・インディアンと同様に原始的であり、道具の使い方だけではなく、人間の文化的発展の過程も民族誌の世界で知ることができると唱えた（Pownall 1795）。このような考え方は当時の宗教的抑圧のために必ずしも一般の容認するところではなかったが、19世紀中葉に至り、イギリスのウィルソンやラッボクに考え方が継承され、アメリカ人スミスにより人類の発展と民族誌の体系化がなされるようになった。

これら当時の人々の立場は、考古学的資料を民族誌が示す資料で解釈することであり、考古

遺物と民族誌資料を同一に取り扱うことで、疑問を解決し、事実を明らかにしうると考えたのである。20世紀に至り、ソーラスは無差別に都合の良い民族誌を使うのではなく、アナロジー（民族誌的類似）という用語を用いて、発展段階が同様と想定される民族誌の資料を援用することを心がけ、先史時代社会を生き生きと叙述した（Sollas 1911）。彼が比較説明のために用いた民族誌は、旧石器時代前期はタスマニア人とオーストラリア・アボリジン、中期はブッシュマン、後期はエスキモーのそれで、極めて具体的に生活内容を記している。

1927年『Antiquity』創刊号の巻頭言でクロフォードは、考古学研究の在り方について述べた中で、民族誌との対比研究に触れている。かれはウェセックスの高地性集落とマオリ族のPaについて比較し、

従って現在の灯りの中で過去をみることは、過去に生命と本質を賦与することである。
（中略）原始的な社会の習慣や展望に親しむことは、（考古学者にとっては）必要なことである。

と論じて、民族誌との対比研究の有効性を説いている（Crawford 1927）。これと同様な観点は、マッキィーバーによっても説かれていて、今一のイギリス考古学界に、少しずつ姿を変えながらも受け継がれてきている。クラークは現存する社会を参照することで失われた古代世界の再建に努める必要を唱え、民族誌的対比、とりわけ民俗文化Folk Cultureとの比較検討が何よりも必要なことを説いた（Clark 1951）。戦前から彼は民族誌的観点からの分析を試みた論文を発表しているが、Prehistoric Societyにおいて、生業活動に係わる分野での民族（俗）誌を利用して、ヨーロッパの先史社会を見事に描き出している。民族誌の資料を使うとき、彼は従来の大まかな条件付使用ではなく、「同一の生態条件下で、同一の生業と同様の生活水準」の事例との比較という極めて限定されたものであり、しかも民族誌は手懸りを与えるもの、すなわち考古学者に考え方の幅を広げさせるものとしての位置づけを行っている。これと同様なことはチャイルドにも言えるのであり、チャイルド自身著作の中で民族誌的対比で得られた成果を応用しながらも、地域内的対比Local parallelsがより有効で、より信頼がおけるものとして、民族誌に対する地域的・歴史的展望の必要を論じている（Childe 1956）。

技術史の比較研究

クラークやチャイルドにみられる、より厳密な民族誌の使用法は、それなりに信頼の置けるものである。しかしそうした観点のみでは集落研究とか社会の復元には民族誌を利用しにくいのであり、事実彼らが民族誌の知識を応用して成功を収めているのは、遺物の作り方や使い方といった技術的側面が殆どであることから窺いえよう。

考古学的世界に民族誌的知識を取り入れることで、著しい成果が挙げられているのは技術史の分野である。ハイファーは*Die Werkzeuge des Steinzeit-Menschen*の中で、考古学者が発掘しうる生活に関する諸道具をとりあげて、それらの作り方、使い方を豊富な民族誌の事例で説明していて、今日なおわれわれに重要な示唆を与えてくれている。考古学者の中には、また自ら民族誌的世界には行って行き、直接の体験を基にして考古学の研究課題を解決しようとする試みもみられる。ニューギニアの高地に行き、ヨーロッパの新石器時代とニューギニアの技術の比較研究をなしたブラックウッドの仕事はその好例であり、今日デンマーク人のステイーン

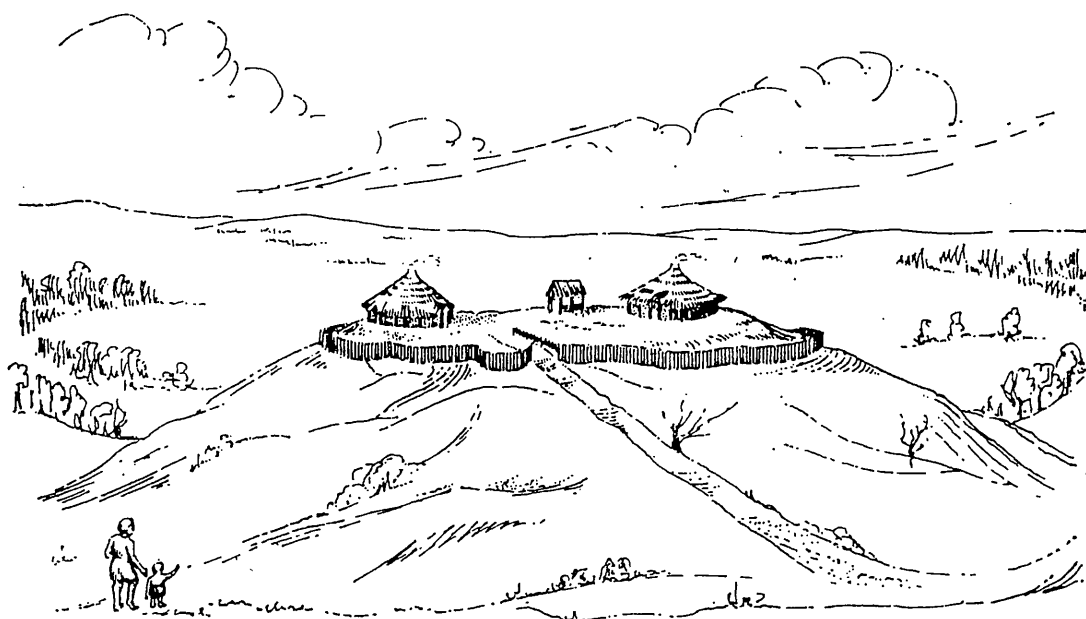


図1 ヨークの高地性集落（メゴウ、シンプソン 1979、より）

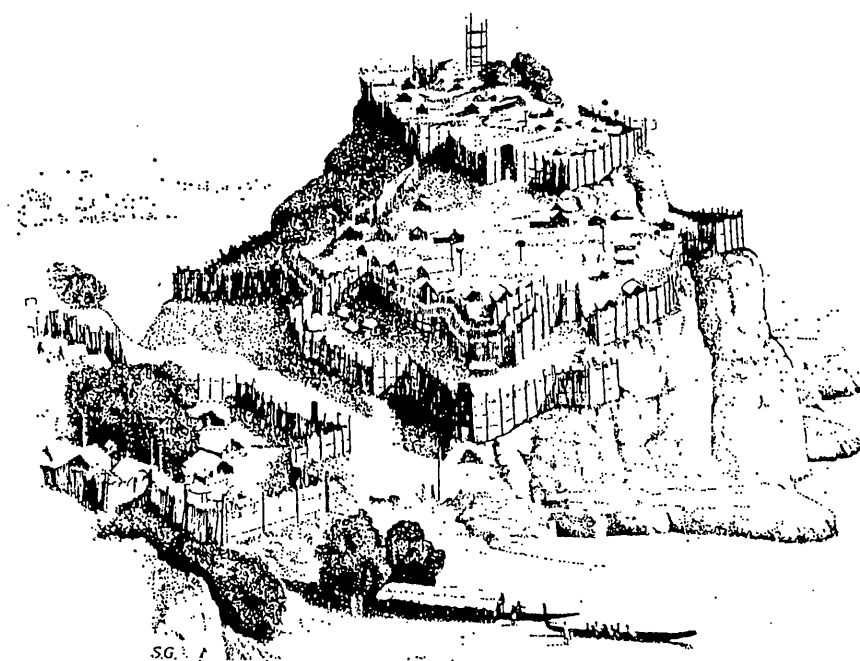


図2 マオリのパ（オルメ 1981、より）

ズベルグの研究に引き継がれている (Steensberg1980)。戦前の日本では「土俗学」と称して民族誌的世界での技術史に関する分野での研究が盛んに行われ、個々の遺物の用途について多くの研究成果が得られている。

民族誌の応用を否定する立場

考古学の世界に民族誌研究で得られた知識を導入することに対して、これを否定する研究者も少なくはない。ネガティブな立場をとる学者には次のような主張がみられる。

考古学と民族誌といういわば異なった世界でえられた成果を結びつけるとき問題点、すなわちスミスの言葉を借りると「われわれが知りたいと思う人間の活動と、眼にすることができる結果」との間の論理的な結節点の欠如が問題となる。われわれが民族誌の世界で正当と思われるようなもののみを、先史時代人が目指していたと仮定すること自体を疑問視するのである。考古学者にとっての民族誌は「信じ難いほどの行為の多様性を示すのに役立つのみ」であると位置づける (Smith 1955)。

ラミング・エンペレーレやルロア・グーランは考古学の世界に民族誌の成果を応用することを頭から否定する立場の学者である。ラミング・エンペレーレやルロア・グーランはルナックにより提示された、フランコ・カンタベリアの狩猟壁画をオーストラリアのアボリジンの間にみられる類感呪術で説明するのに対して、比較民族誌が提供する唯一の合理的な正しい結論は、たいそう一般的なものであり、特殊具体的な現象を一般的なものとして解釈するもののだとして、絵画の解釈は考古学的データそれ自体で導かれるべきことを強調する。ルロア・グーランはこうした見地から一切の民族誌的知識・解釈も無視して、ヨーロッパの洞窟壁画の中に二元論に基づく壮大な宇宙観を読み取った (Leroi-Gourhan 1965)。彼ら二人は考古学資料一般というより、洞窟壁画を「解釈する」という限定された状況下での指摘であることに注意を払う必要がある。

ラミング・エンペレーレやルロア・グーランの立場については、アッコーがいみじくも指摘するように、彼らの解釈は現代絵画の根底にある原理だけを唯一の基盤とするものであり、このことは解釈上に独断がはいりやすい。民族誌的対比を用いることの意味は、著者自身が具備しているその国の文化的伝統の枠内でのみ解釈することを避けるためであり、人間活動の根底に潜む様々に変異ある因子を摘出するために重要であることにほかならない。グーランなどフランス考古学界にみられるこうした一般的立場に関しては、このアッコーの指摘が最も適切であろう (Ucko & Rosenfeld 1967)。人類学を含め他の学問分野から切り離して、考古学独自の物質資料のみで歴史的世界を再編成しようとする試みもないわけではないが、遺物や遺構を縦か横に並べるまではともかく、それらを総合し、歴史的世界に位置づけようとする時には、その手法や用語事態に人類学や民族誌がなした成果や解釈を取り入れざるをえないことは、どの立場をとるにせよ認めざるをえない。

民族誌的解釈の有効性

物質資料の人類学的解釈という側面から離れても、様々な生活様式の変化の過程については、民族誌の世界から多くのイメージを得ることができる。家畜の始まりに関しては動物学者の鑑

定に依存するが、一般的に家畜か否かの識別は極めて困難である。明確な骨学的な差異が認められることで鑑定されるが、家畜飼育の初期段階においては体格的な劣化は明確には骨に現れない。カナダのアサバスカン族やアラスカのインガリック族などでは、広い囲み柵をつくり、その中にシカを追い込んで放飼しておくことがなされている（図3）。必要に応じてシカを捕らえることを可能にするためである。これなどは動物の一定期間の飼育であり、家畜化への第1歩とすることができる。古代中国では春季や夏季にはブタを野外に放飼して草や水藻を食料とさせ、窮冬には槽で飼育する方法がとられていた。子連れのイノシシを捕らえて親は食し、子供（ウリボウ）はある程度大きくなってから食料とすることや、メスブタを何匹か繋ぎとめておいて、野生のイノシシと交配させるニューギニアの民族事例などは、動物家畜化への様々な試みを良く物語る（加藤1980、甲元1982）。こうした過程は動物の骨の分析からだけでは認識し得ない事象である。

また民族誌の事例は直接に使用するだけではない。狩猟民や焼畑耕作民に対して、われわれはとかくマイナスのイメージを強調しすぎるきらいがあるが、リーの分析（Lee 1968）やサーリンズの解釈では（Sahlins 1974）、狩猟民や焼畑耕作民は豊かな社会生活を送っていたことが主張されている。事実、食料獲得のために消費するエネルギーとそこから得ることが可能なエネルギーとの比較においては、狩猟民ははるかに豊であり（岡田1975）、今日のわれわれよりも多くの自由な時間を享受していたことが統計資料で表されている。本来そうであったかどうかは別にして、にもかかわらず人類は穀物栽培や家畜飼育を始め、集約化して今日の社会を作り出した。その因子を考える時に重要な視点を提供してくれるのである。

今日使われている民族誌の取り扱い、これまでのように考古学的事実との1対1の対応関係、もしくは事実解釈の幅を広げるために使用するだけではない。民族誌をモデルとして捉え

ることが一般的である。このモデルはいわば理念型であり、実際にはどこにも存在しない。すなわち問題関心をもっている先史時代の社会と類似した、もしくはいくつかの共通点をもつ民族誌の事例を取り集めてモデルを作り、そのモデルが残すであろう物質的遺物と、対象とする社会のそれとを比較検討することで、両者の異同や類似、特色を摘出する接近法である。レンフリューはこうした手法を用いて、イギリス新石器時代から青銅器時代にかけての巨石墓の社会を描きだしている（Renfrew 1972）。

このように民族誌の事例と考古学的事実についての考え方は大きな変化をみせており、そのことは結局、考古学研究における民族誌の有効性を認識して、より確実な適応の仕方を獲得するにはどうしたら良いか、という方面に向けての流れを示すものである。考古学者が民族誌の

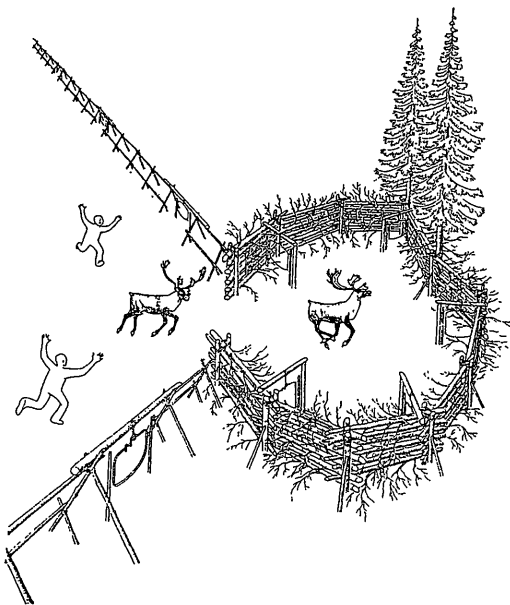


図3 インガリックのシカの追い囲み
（オズワルド 1976、より）

調査を行い、物質文化を社会、文化、行動様式との関連を追及する民族考古学の世界が生まれてきている。

近來の応用研究

最後に、最近出版された民族誌の事例を使用した考古学研究の主要な書籍を紹介して、一文を終えることにする。

一般的な入門書としては、

八幡一郎編『生活技術の発生』図説日本文化史大系 2 巻、角川書店、1960年

Bryony Orme, *Anthropology for Archaeologists*. Duckworth, 1981

がある。考古学と民族誌や、相互の対比研究の歴史からはじまり、食料獲得方法、集落、社会組織、接触、儀礼と宗教、放牧民などが取上げられている。民族誌の事例を豊富に使い、最後には民族誌の事例との相違にまで論及がある。

食料獲得方法について、道具とその使用法を中心として多くの民族事例を取上げて解説したものに、

W. H. Oswalt, *An Anthropological Analysis of Food Getting Technology*. John Wiley & Sons, 1976.

があり、モデルを使用して先史社会復元を試みたものとしては、

C. Renfrew, *Before Civilization*. Jonathan Cape, 1973.

があり、これは大貫良夫氏により『文明の誕生』として訳出され、岩波書店から発行されている。モデリングを試みて成功を納めた事例として、

M. A. Jochim, *Hunter-Gatherer Subsistence and Settlement*. Academic Press, 1976.

がある。ジョキムはダニューブ河上流の中石器時代に属する 6 ケ所の遺跡を分析対象とし、動物相の変化から、集団の季節的移動を明らかにして、先史社会の見事な復元を行っている。余談ではあるが、アカデミック出版社から発行されている *Studies in Archaeology* シリーズには、随所に新しい試みが認められる。

A. Steensberg, *New Guinea Garden*. Academic Press, 1980.

は、ニューギニア高地に行き、初期農耕民の技術をつぶさに検討して、ヨーロッパのそれと比較研究を試みたものである。ステーンズベルグはデンマークの考古学者で、収獲具の研究者として知られ、鎌の使用法とその効能を調べるための実験研究を戦前からおこなっており、一歩踏み込んで民族事例との比較検討を行ったものである。

民族誌と考古学との関係についての理論的側面に関しては、

M. Spriggs, *Archaeology and Anthropology*. B. A. R. Supplement Series 19, 1977.

B. J. Orme, *Twentieth Century Prehistorians and the Idea of Ethnographic Parallels*. *Man*, N. S. 9, 1974

に適切な解説が書かれている。

引用文献

岡田宏明1975「環境と人間」吉田編『文化人類学読本』東洋経済新報社

- 加藤晋平1980「縄文時代の動物飼育」『歴史公論』 6 卷 5 号
- 甲元眞之1982「弥生時代動物随葬の一樣相」『歴史公論』 8 卷 9 号
- チャイルド・近藤義郎訳1964『考古学の方法』河出書房
- クラックホーン・光延明洋1971『人間のための鏡』サイマル出版会
- A. Leroi-Gourhan, 1965 *Prehistoire de l'art occidental*. Lucien Mazend
- C. Renfrew, 1972 Beyond a Subsistence Economy. Moore ed. *Reconstructing Complex Societies*.
Bulletin of the American Schools of Oriental Research Supplement 20
- J. G. D. Clark, 1951 Folk Culture and the Study of European Prehistory. W. F. Grimes ed. *Aspects of Archaeology*. Edwards.
- L. Pfeiffer, 1920 *Die Werkzeuge des Steinzeit-Menschen*. Jena Verlag von Gustav Fischer
- M. A. Smith, 1955 The Limitations of Interference in Archaeology. *Archaeological Letters*. 6
- M. Sahlins, 1974 *Stone Age Economics*. Tavistock Publications.
- D. G. S. Crawford, 1927 Editional. *Antiquity*. 1.
- P. J. Ucko & Rosenfeld, 1967 *Palaeolithic Cave Arts*. Duckworth.
- R. B. Lee, 1968 What Hunters Do for Living or How to Make out on Scarce Resources. R. B. Lee & DeVoire eds. *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company.
- T. Pownall, 1795 *An Antiquarian Romance*. Orme 1974 による。
- V. G. Childe, 1956 *Piecing Together the Past*. Routledge & Kegan Paul
- W. J. Sollas, 1911 *Ancient Hunters and their Modern Representatives*. Macmillan and Company.